

佐藤佳代子

* 登場人物

酒井 ハル(34) カレーショップ準備中
菊川 亮介(37) ラーメン店主
李 健君(7) 亮介の義理の息子
李 麗君(32) 健君の母親、亮介の元妻
船木 敏郎(77) 船木商店店主
船木 いく(74) 敏郎の妻
狭山 美咲(34) ハルの親友

* あらすじ

酒井ハルは友人の狭山美咲とスープカレーショップを開こうと準備している。友人の菊川亮介のラーメン屋で試行錯誤をくりかえしている。亮介には義理の息子、中国人の健君がいた。健君の母親麗君は男を作って出て行った。最近になって男と別れたらしく健君と中国へ帰りたいと言ってきている。健君を渡したくない亮介は健君をハルに預け、麗君に会いに横浜へ向かう。ハルはカレーに山菜を入れる事を思いつき、健君を連れて実家のある滝上へ山菜取りに向かう。ハルは滝上に向かう途中、飛び出してきた小鹿をかばってハンドルを切りそこねタイヤをパンクさせてしまう。工具を借り「船木商店」に寄ると店仕舞の様子。夫の敏郎を亡くした船木いくは閉店するが、迷いこんで育てた小鹿の事が心配だと言う。何よりも小鹿と離れるのが切ないと言う。小鹿の鳴き声が山に悲しく響き渡る。ハルはその鳴き声が忘れられない。

SE ラーメン屋の引き戸を開ける音

美咲「いいにおうい。ハルったら腕上げたわね」

ハル「(得意気に)そうお？」

亮介「ラーメン屋でカレーの匂いってのもど
うかと思うけどね」

ハル「カレーの匂いって食欲そそるじゃない。

この匂いがお客さん呼んでると思うけどな」

美咲「そうだよ、亮介さん。私とハルふたり
で、スープカレーの修行しつつ、ラーメン

屋の宣伝もしてるっていうことよ」

亮介「このできそこないのスープカレーが宣
伝になんかなるのかね」

ハル「できそこないだからいいんじゃない。

最初から完璧なもの作れたらおもしろくな
いわよ」

タイトル「ホットヴォイス」

SE 鍋がぐつぐつ煮立っている。

美咲「今日のはまた特別いい匂いがするね。

何でダシとったの？」

健君「(突然)これだよ！」

美咲「ぎゃー。それ何？鶏の足？」

ハル「こら！健君。だめよ、それまだ使うん
だから」

亮介「お、健君、おかえり」

健君「ただいま。美咲ちゃん。はい、お水」

美咲「ありがと。健君。健君ってパパとちが
ってよく気がきくのね」

亮介「パパとちがってっていうのは余計だよ、

美咲ちゃん」

ハル「でも健君で私には冷たいのよね」

健君「ハルにだってやさしいじゃんか」

ハル「ほらね、呼び捨てだし」

美咲「亮介さんがハルって呼ぶから健君だつ
てハルって呼ぶのよね」

ハル「美咲は美咲ちゃんで、私はハルかあ。

何かばかにされてる気がするんだけどなあ。

健君で私の事嫌い？」

健君「別に」

ハル「じゃあ、ハルちゃんと呼んでよ」

健君「じゃあ俺のことも健君君と呼ぶ？」

ハル「健君は健君でしょ」

健君「じゃあハルもハルだ」

SE 携帯電話が鳴る。

亮介「はい。・・・うん。・・・うん。・・・

え？話が違うだろ・・・。そんなの無理

だ・・・。わかった」

ハル「どうしたの？亮介」

亮介「いや、何でもない」

健君「パパ、今の電話ママから？」

亮介「そうだよ」

健君「ママ何て？」

亮介「別に。健君は元気かってさ」

健君「そっか。(少しがっかり)俺、公園に

遊びに行ってくる」

美咲「私も買物に行く。健君一緒に行こ」

ハル「美咲、健君お願いね」

美咲「了解」

SE 引き戸が閉まる音。

ハル「健君のママってどこにいるの？」

亮介「横浜」

ハル「遠いね」

亮介「あいつ、健君連れて中国帰りたいて

言ってるんだ。あの男とはとくに別れて、

健君の父親と再会したらしくてさ」

ハル「健君のお父さんと会ったんだ。亮介、

どうするの？」

亮介「健君置いて男と勝手に出て行った母親
になんか渡せるか」

SE 鍋がぐつぐつ煮立つ。

SE スープを一口味見する。

ハル「何かひと味足りないのよね。ラーメン

のスープとしてならばつちりなだけで」

亮介「鶏がらでさっぱりしすぎてて、コクが

足りないんだよ。もう少し香辛料足した方

がいいんじゃないか」

ハル「そっか、臭みが必要なのか。じゃあ

ハーブでも入れてみようか」

亮介「ハーブもいいけど、山菜とかは？香辛

料にはもってこいだ」

ハル「山菜？」

亮介「今、旬だし。たけのこ、タラの芽、うどに行者にんにく、わらびにぜんまい・・・種類もいろいろあるし」

ハル「そうね、いいかも！地産地消でまさに北海道のカレーね」

SE 引き戸が開く。

美咲「ただいま」

ハル「おかえり、美咲。健君は？」

美咲「お友だちとサッカー」

ハル「そっか。ねえ、美咲、いいこと思いついたんだけど」

美咲「何？何？」

ハル「カレーに山菜入れたらどうかしら？」

美咲「山菜かあ。でも味ってどうなるのかな。臭くならない？」

ハル「大丈夫よ。美咲は山菜何が好き？」

美咲「セリかなあ」

ハル「セリ！セリもおいしいよね」

美咲「でもセリなんてカレーにあうかな？」

亮介「食べてみ」

SE スープカレーを一口食べる。

美咲「わあ。結構おいしいかも。うん。いけるよ。これってセリ入ってるの？野菜の味はするけど臭みがないのね」

亮介「ちょうど冷蔵庫にあったから刻んで入

れてみたんだ」

ハル「決まりだね。ウチのお店の看板メニューは山菜カレーにしよう」

美咲「いいね！山菜カレー」

亮介「ところで店の名前は決めたのか？」

ハル「ホット何とかって名前にしたいの」

亮介「おいおい、その何とかが大事なんだろうが」

ハル「まだピンと来ないのよ」

美咲「レッドホットチキンとかは？」

ハル「あははは。それってケンタじやん。パ

クリはまずいよ」

美咲「そっか。じゃあホットレッドとか」

ハル「うくん。悪くないんだけど、パンチが

足りない気がするなあ」

美咲「パンチねえ。じゃあひとり10ずつ考

えてみようよ。その中から選ぼう」

ハル「10つ個！」

美咲「名前はお店の顔なんだからね、ここのお店みたいに健君で名前つけるわけにはい

かないし」

ハル「(渋々) はいはい。わかりました」

美咲「亮介さんもよ！」

亮介「え？俺も？俺は関係ないだろ」

美咲「関係あるよ。プロデューサーだもん」

ハル「ぎやははは。亮介、かっこいいじゃん、

プロデューサーだって」

亮介「勘弁してくれよ」

SE 引き戸を開ける音。

ハル「ちよつと亮介、本日休業ってどういうことよ！」

亮介「ハルちよつとよかった。俺これから横浜行ってくるよ」

ハル「横浜？健君のママに会いに？」

亮介「ああ。あいつ、健君連れて来てくれて言ってるんだけど、渡せないよ。だから俺がひとりで行って話つけてくる」

ハル「そっか」

亮介「ハル、悪いけど健君頼むよ」

ハル「そりやいけど・・・」

亮介「いいけど何だよ」

ハル「健君どうしたいのかなって思ってた。ママに会いたいんじゃない？」

亮介「あんな母親でもか」

ハル「健君にはママはママなのよ」

ME

SE 引き戸が開く。

ハル「健君、おかえり」

健君「ハル、パパは？買物？」

ハル「パパはママに会いに行ったの。健君、出かけるわよ、仕度して」

健君「ええ〜どこ行くのお？」

ハル「教えな〜い」

健君「じゃあ行かな〜い」

ハル「山菜とりよ。手伝って、健君」

健君「しかたねえな」

SE 車で走行する車内。

SE カーナビの音声

カーナビ「道央自動車道を通るルートです」

健君「どこ行くのかそろそろ教えてよ。旭川に向かっている？」

ハル「私の実家に向かっているの。健君、滝上って知ってる？」

健君「聞いたことある」

ハル「健君が生まれたのって中国だよ。どのへん？」

健君「知らね」

ハル「行きたいと思わない？」

健君「別に」

ハル「健君でさ、今でも中国語話せるの？」

健君「もう忘れた」

ハル「健君の名前って、中国語で何て言うの？」

健君「リージャンジュン」

ハル「ジャンジュン？ちゃんと覚えてるじゃない。ママの名前は何て言うの？」

健君「そんなこと聞いてどうすんの？ハル何が言いたいのか？」

ハル「ママに会いたいかかって思っただけさ」

健君「会いたくないよ」

ハル「本当に？。パパに遠慮してるんじゃないの？」

健君「そんなんじゃないよ」

SE ラジオをつける。

DJ「ラジオネーム「くるくるさん」からの

リクエスト、エリック・クラプトンのレイラをお届けします」

ME レイラが流れる。

SE カーナビの音声

カーナビ「まもなく料金所です」

SE 車を停めて窓を開ける。

料金所係員「3400円です」

ハル「はい」

料金所係員「ありがとうございました」

SE 車が発進する。

SE 車が走行する車内

ハル「健君、もうすぐ着くからね」

健君「うん」

ハル「お店があったらジュースでも買おう」

健君「俺、コーラがいいな」

ハル「OK。コーラね」

健君「でもお店なんてなさそうだよ。ていうか何もないんだけど」

ハル「もうすぐお店あるはずなんだけど」

健君「ここ何てとこ？ホントに何も無いけど。」

ハルの実家ってすごいとこだね」

ハル「私の実家はまだ先よ。ここは浮島峠にさしかかるとこ」

健君「浮島峠？聞いたことないな」

ハル「でしようね。こっちの方に来る機会なんてないものね」

健君「うわ、鹿だよ、鹿。こんな近くに。ここにも、あそこにもいる」

ハル「何！健君びつくりするじゃない」

健君「鹿がいたんだよ」

ハル「サファリパークみたいでしょ」

健君「サファリパークって、ハル、怖くないの？」

ハル「平気よ。それに熊よりはましでしょ」

健君「このへん、熊も出るの？」

ハル「たまにね」

健君「うそだあ。俺帰る。うわつ、今度はきつねだよ」

ハル「平気だつてば。私だってまだ熊は見たことないもの」

健君「できれば俺も見たくないんだけど」

SE アクセルを踏んでスピードを上げる。

健君「うわつ、また鹿だ！」

ハル「きゃ、あぶない！」

SE 急ブレーキをかける。

SE タイヤがパンクする。

ハル「ふう〜。何とか切り抜けた。あの小鹿こつち見てたわよね。目があったもの」
健君「うん。こつち見てた。何でだろ」

ハル「でも何かやな予感」

健君「何だよ。子鹿は逃げたよ」

ハル「そうじゃなくて、パンクした気がするの？」

健君「まじ！」

SE 車を脇に停車させる。

SE 車のドアを開ける。

ハル「やっぱり！どうしよう」

SE 車のドアを閉めて発進する。

ハル「健君、タイヤ交換しなきゃだめみたい。このままじゃ走れないわ」

健君「ハル、タイヤ交換なんてしたことあるの？」

ハル「ないけど、何とかなるわよ。教習所で習ったもの」

健君「それっていつの話？」

ハル「え〜と15年前かな」

健君「15年前って・・・」

SE 車が走行する車中。

SE タイヤがパンクして走る音。

健君「お店あったよ」

ハル「そうそう。船木商店、これよこれ」

健君「でも閉まつてるみたい」

ハル「とりあえず聞いてこよう」

SE ウィンカーを上げて車を停める。

SE エンジンを止め、車のドアが閉まる。

SE キューイーキューイーと動物の鳴き声が聞こえる。

健君「何の鳴き声だろう」

ハル「さあ。きつねかしらね」

健君「きつねって鳴くの？鹿かな？」

ハル「鹿も鳴くのかしらね」

SE 店のドアを開ける。

ハル「ごめんください」

いく「はい。ただいま」

ハル「あの、お休みのところすみません」

いく「休みじゃなくて、店閉めるんですよ。もう仕入れてないんですけど、ここにあるものならいいですよ」

ハル「じゃあお茶とコーラをください。それと、車がパンクしちゃって工具あったら貸してもらえませんか？」

いく「パンクですか。それはたいへんね。工具あったかしら？物置見てくるから裏にまわってくれるかしら？」

ハル「すみません」

いく「僕、ガムもあげるね。もって行って」

ハル「そんな、お金払います」

いく「いいのよ、もう売物じゃないし。僕、はい」

健君「ありがとう」

ハル「すみません」

いく「裏にまわってちようだいね」

SE 店のドアを閉める。

SE キューイーキューイーと動物の鳴き声が山に響く。

SE 音が山に響く。

健君「おぼさん、あれ何の鳴き声？さつきも聞いたんだ」

いく「あれはね、キューだよ」

健君「キュー？」

いく「キューは子鹿なの」

健君「鹿って鳴くんだけ。でも何でキューっていうの？」

いく「キューはね、私とおじいさんが育てたんだよ」

健君「育てたって、飼ってたの？」

いく「うん。そうなの。あ、これだ。工具つてこれでいいかい？おじいさんが使ってたものだから、まだ使えるとは思うけど」

ハル「ありがとうございます」

SE ジャッキで車を持ち上げていく。

いく「お茶入れたから、少し休みなさい」
ハル「ありがとうございます」

SE お茶を飲む。

いく「どうしてパンクなんかしたの？」
ハル「子鹿が飛びだしてきて、急ブレーキ踏
んじやって」

いく「それキューだよ、きつと」
ハル「おじいさんと育ててた子鹿ですか？」
いく「うん。驚かせちゃったね」

ハル「あれがキューですか。ここにはおひと
りですか？おじいさんは？」

いく「先月おじいさんが亡くなつてね。ひと
りじゃどうしようもなくて、紋別にいる娘
夫婦のところに行くことにしたの」

ハル「それでお店閉めるんですね。淋しいで
すね、ここ離れるの」

いく「淋しいのはここを離れることよりもキ
ューと離れることなの」

ハル「そんなになついていたんですか」
いく「キューの鳴き声聞いたでしょ。山に返
してやりたいんだけど、私が心配なのか返
つていけないの。私の側から離れていかな
いのよ」

ハルN「船木いくさんは私たちが山菜をとり
に来たのと言うと、夫の敏郎さんが山菜
とりの名人だったと言い、山のどのへんに
どの山菜があるかを教えてくれた。そして

敏郎さんがキューを連れてきたときの話を
してくれた」

SE キュー、キューと子鹿の鳴き
声をする。

敏郎「だいぶ、とれたな。うまそうな筍だ。
今日はこのへんでやめておくか」

SE キュー、キューと子鹿の鳴き
声をする。

敏郎「どこで鳴いてる？」

SE (だんだん近づいて) キュー
キューと子鹿の鳴き声をする。

敏郎「お前、どうしたんだ。母さんとはぐれ
たのか」

キュー「(さらに近づいてきて) キュー」
敏郎「わらび、食うか」

SE 子鹿、わらびを食べる。

敏郎「おお、うまいか、もつと食べるか？筍
もあるぞ」

SE 子鹿、筍を食べる。

敏郎「じゃあな。俺はこつちで、お前は向こ
うだ。気をつけて帰るんだぞ」

子鹿「キュー」
敏郎「早く行けよ」

子鹿「キュー」
敏郎「ついてきちゃだめだ。お前は山に帰
るんだ」

子鹿「キュー、キュー」
敏郎「お前、足怪我してるのか。血が出て
ぞ。おとなしくしてろ」

子鹿「キュー」
敏郎「これでよし。歩けるだろう？さあ山へ
帰れ」

子鹿「キュー」
敏郎「帰らないのか。困ったな。お前、母さ
んはどうしたんだ？」

SE 店の引き戸を開ける音。

敏郎「おおい、ただいま」

いく「(奥から) おかえり」
敏郎「山からついてきちゃったよ」
いく「何がついてきたんですか？」

敏郎「あいつだよ」
いく「あいつって・・・子鹿ですか」

敏郎「あいつ足怪我しててな、母親とはぐれ
たらしくて、わしから離れんよ」
いく「かわいそうにねえ。母鹿は、事故にで
もあつたのかね？」

敏郎「たぶんな。鹿の通り道に人間が道路作
ってるんだ。居場所なくしてもこうしてな
ついてくる。かわいそうな奴だよ」

いく「あたためた牛乳でもあげましょうか」
キュー「キューーキューー」

敏郎「キューキューよく鳴くから、お前の名前はキューにしよう」

SE 小鹿が牛乳を飲む。

健君「その子鹿はどこに行ったの？」

いく「山に返してやったの」

健君「どうして？ひとりぼっちでかわいそうだよ」

ハル「健君・・・鹿は山に住んでるものなの」

いく「おじいさんが亡くなって、私ひとりで

キューの世話ができなくてね」

健君「あれ、きつとキューだよ、ハル。さつき出会った子鹿。きつとキューだよ」

ハル「そうね」

いく「キューはね、私が心配なのよ。それで様子見に来てくれるの」

健君「お婆さんのこと見に来てるの？」

いく「足も治って元気になったし、離してや

ったんだけど、なかなか山へ帰ろうとしな

いの。何度も何度もふりかえって。あのと

きはせつなかつたねえ」

ME

いく「キュー、山へ帰りなさい。あんたの家

はここじゃないよ。さあ、早く」

キュー「キューーキューー」

いく「もう戻ってきちゃだめだよ。キューは山で暮らすんだよ」

キュー「キューーキューー」

いく「私は大丈夫だから、行きなさい」

キュー「キューーキューー」

いく「うんうん。ばいばい」

SE 子鹿の鳴き声が山になりひびく。

いく「それからまたまにね、キューはここへ戻ってくるの。私とおじいさんを親だと思

っていたのかねえ」

健君「（泣きながら）キューがかわいそう」

ハル「健君、ちがうよ。キューは幸せだった

のよ」

健君「どうして？」

ハル「おじさんとお婆さんと3人の、ここで

の暮らしが幸せだったの。だからこうやって、お婆さんに会いにくるのよ」

健君「そっか」

いく「そうだといいんだけどねえ」

SE ラーメン屋の引き戸を開ける音。

亮介「おかえり」

健君「ただいま。パパ、いつ帰ったの？」

亮介「さつきだ」

健君「これ、お土産だよ」

SE 袋から山菜を取り出す。

健君「これがうどでしょ、セリでしょ。タラの芽でしょ」

亮介「収穫これっぽっちか。ハル、こんなじゃ店開けないぞ」

ハル「いいの。山には山の決まりがあるの」

亮介「何だそれ」

ハル「とり過ぎちゃいけないってことよ。動物たちに山のものを少しだけ分けてもら

の。ね、健君」

健君「うん。キューたちにね」

亮介「キュー？何だそれ」

健君「子鹿だよ」

亮介「子鹿ついたらバンビだろ」

ハル「ぎやはは。それってそのまんまじゃん」

亮介「健君、これやるよ」

健君「わあ、サツカーのユニフォームだ。パパこれ大事にしたたよね、いいの？」

亮介「おう。パパの宝物なんだぞ。大事にしてくれよ」

健君「うん！ありがとう」

亮介「健君、来週ママが迎えにくるよ。ママと一緒に中国に行きなさい」

健君「パパは？」

亮介「パパは男だからひとりでも平気だ」

健君「パパと一緒にやなきや嫌だよ」

亮介「中国で健君の本当のパパが待つてるんだ。そのパパはママと健君と一緒に暮らし

たいんだって」

健君「俺、行かないよ」

亮介「行かなきゃだめだ。健君は男だろ。ママを中国に連れていかなきゃだめだ」
健君「だって、サツカーだって続けたいし、友達とも離れたくないし、パパにだって会えなくなるし・・・(嗚咽をもらす)」
亮介「また、会えるさ」
健君「絶対?」
亮介「ああ。絶対会えるよ」
ハル「(泣きながら) 健君もキューみたいにならないうちにきて。ハルもここでずっと待ってるから」

ME

SE 引き戸を開ける音。

美咲「いいにおい。今日はまた一段と香ばしい匂いね」
ハル「でしよ。たまねぎとにんにく、こんなになるまで炒めたのよ」
美咲「お、やるね。ハルちゃん」
亮介「おまえら、たまには昼どきの忙しいラーメン屋手伝おうって気はないの? いつもいつも昼はずして来るし」
ハル「亮介が忙しいかと思って、邪魔しないように気使ってるのよ」
美咲「ハルは、健君が帰ってくる時間に合わせてここにきてたのよね」
ハル「もうくせになっちゃってるのよ、この時間にここに来るの」

美咲「健君、元気にしてるかな」
亮介「昨日、電話きてた。あいつ学校楽しいって、もう馴染んでやんの」
ハル「淋しい? パパ」
亮介「淋しくなんかいないよ」
美咲「ハルがいるもんね」
亮介「ハルはあ?」
美咲「健君に言われたの。あのふたりのことよろしくって」
ハル「何それ」

美咲「キューみたいに様子見にくるからって。今度会うときはパパとママって呼ぶの楽しみにしてるって」

亮介「あいつ余計なこと・・・」
ハル「ホントよね」

美咲「じれったいのよ、ふたりとも。健君と私がいなきゃいつまでもモタモタしてるんだもの」

亮介「ほつといてくれよ」
美咲「健君とキューのお願いでも?」

ハル「キュー? そうだ! 思いついた。私たちの店の名前ホットヴォイスにしよう」

美咲「熱い、声か。いいね。ホットヴォイス」
ハル「決まりね。いいわよね? プロデューサー」

亮介「いいんじゃないの」

SE 鍋がぐつぐつ煮える音。

終わり